

は、後二者はまだ十分に活用されるに至っていない。数値予報モデルの精密化に伴って、中小規模現象予報の精度向上が望まれているが、そのためには現在の高層観測網の粗さを改善する必要がある。そのような目的に関し、ここでは本州南岸沖の中規模雲システムを例に衛星風の算出を行い、第3図に示すような詳細なベクトル分布を得る事が出来た。衛星風を数値予報モデルの初期解析に利用するには、その精度や代表高度の決定、時間的・空間的スケールの代表性等、多くの問題が残されているが、海上も含めた広範囲にわたる継続的な同時観測という面では、現在これ以上の手段は望めない。今回得られたような風ベクトル分布も、衛星システムによる観測無しには考えられないものであった。

今回の衛星風ベクトル算出にはルーチン観測（即ち30分間隔の）画像を使用した。現在のGMSシステムでも撮像領域を限定する等して画像時間間隔を変えれば、更に精度の良いベクトルがより多く得られる事が期待できる（Takano・Saito, 1985ら）。中小規模現象の観測手段としての衛星システムの重要性は、衛星風ベクトルのみならず、今後更に増すものと考えられる。

## 9. 謝辞

この調査を進めるにあたって、気象庁数値予報課の瀬上哲秀技術専門官からは、63.5 km 客観解析格子点データおよび格子点ポラステレオ変換プログラムを拝借

し、大変お世話になり、ここに感謝の意を表します。

## 文献

- 櫃間道夫, 1979 a: 本州南岸沖を西進して発達する中規模の雲域, 天気, 26, 309-311.  
 ———, 1979 b: 前項に同じ(その2), 天気, 26, 605-610.  
 ———, 成川二郎, 1980: 前項に同じ(その3), 天気, 27, 809-816.  
 ———, ———, 1981: 前項に同じ(その4), 天気, 28, 317-321.  
 黒田雄紀, 1983: 中規模じょう乱の雲解析, 研究時報35巻別冊, 管区研究会誌選集(1), 64-65.  
 ———, 庄司桂一郎, 1985: 前項に同じ(その2), 研究時報36巻別冊, 管区研究会誌選集, 100-101.  
 長谷川隆司, 1982: 南岸沖小低気圧(本州南岸沿いを西進後東進する中間規模じょう乱), 研究時報, 34, 1-15.  
 Hamada, T., 1982: Representative Heights of GMS Satellite Winds, Meteorological Satellite Center Tech. Note, No. 6, 35-47.  
 斎藤直輔, 1971: 関東地方の北東気流についての一考察, 研究時報, 23, 241-254.  
 山岸米二郎, 1983: 関東地方の局地的悪天時の場の特徴の数値シュミレーション, 天気, 30, 3-10.  
 Takano, I. and K. Saito, 1986: Statistical analyses of wind fields from short-interval VISSR observations, Meteorological Satellite Center Tech. Note, No. 14 (投稿中).

## 月例会「第30回 山の気象シンポジウム」のお知らせ

日時 昭和61年6月21日(土) 13:00 から。

場所 気象庁第1会議室(5F)

講演希望の方は演題に200字以内のアブストラクトを

付して4月末日までに東京管区気象台業務課 岡野光也(〒100 千代田区大手町 1-3-4)まで郵送して下さい。